

年組番

漢字読本
一枚目

ごんべえむらいちねんせい

「権兵衛の村」＊一年生＊

みぎめだまきん

むかしむかし、あるところに右の目玉が金

いろひかおおおおいぬ

色に光る大きな大きな犬がいました。

めとおみ

その目は、どんなに遠くのものでも見ること

できい

が出来ると言われていました。

いぬちいこどもだいす

その犬は、小さな子供が大好きで、いたず

だいすいぬ

らも大好きな犬でした。

なまえごんべえ

名前は権兵衛といいました。

ごんべえまいにちつきしずひのぼす

権兵衛は、毎日、月が沈み日が昇ると直ぐに

てんくうみあおおくちあおおこえ

天空を見上げ、大きな口を開けて大きな声で

うおっひとこえほ

ウォーッと一声吠えました。

もりはやしかぬむらいち

それから、森や林を駆け抜けて、その村で一

年組番

漢字読本
二枚目

ばん たか やま い き のぼ

番高い山へ行つて木に登りました。

ごん べ え き のぼ で き ふ し ぎ いぬ

権兵衛は、木登りも出来る不思議な犬でした。

き うえ た かわ たけ み

木の上からは、田んぼや川や竹やぶなどが見

えました。

き うえ ひる ね

いつもは、この木の上で昼寝をしながら、い

かんが ごん べ え ひ ちが

たずらを考える権兵衛でしたが、その日は違

いました。

くさ なか むし おうさま よ ひだり

草むらの中から、虫の王様と呼ばれている左

あし あお えん けい むし で き つち なか いし

足の青い円形の虫が出て来たり、土の中の石

かい がら しろ ひか ゆう がた さ

が貝殻のように白く光ったり、夕方にしか咲

はな あさはや さ

かないはずの花が朝早くから咲いていたり、

ちが

いつもとは違っていたのです。

年組番

漢字読本
三枚目

こんべえ

いや

かん

権兵衛は、とても嫌な感じがして、どうして

ねむ

も眠れませんでした。

こんべえ

みみ

いと

ほそ

そのうちに、権兵衛の耳に糸のように細い

あめ

ふ

き

雨が降って来ました。

ぱちぱち

なに

も

おと

き

そして、パチパチと何かが燃える音が聞こえ

き

て来ました。

はっ

やま

ちゅうふく

み

なん

ま

ハッとして山の中腹を見てみると、何と真っ

か

ひ

まち

しょうがっこう

せま

赤な火が町の小学校に迫っているではありません

せんか。

たいへん

おも

ま

ひ

ひと

大変だ、と思う間もなく、その火は、一つ、

ふた

みつ

よっ

いっ

むっ

なな

やっ

二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、

ここの

とお

かず

ふ

しょうがっこう

せま

い

九つ、十と数を増やして小学校に迫って行き

年 組 番

漢字読本
四枚目

ます。

おお

おお

やま か じ

大きな大きな山火事だったのです。

ごん べ え

き う え

やま か じ

権兵衛は、木の上から、この山火事のこと

むら

ひと

おお こ え

し

を村の人に大声で知らせようと思いましたか、

あさはや

むら

ひと

き

朝早いせいか、村の人は、なかなか気づい

てくれませんか。

こう うん

きょう

がっこう

やす

せん せい

幸運にも、今日は、学校がお休みなので先生

せい と

がっこう

も生徒も学校にはいません。

こ ども たち

がっこう

も

でも、子供達の学校が燃えてしまったのでは

たい へん

大変です。

ごん べ え

ちから

ほ

つづ

権兵衛は力いっぱい吠え続けました。

した

み

ひ

やま

う え

せま

き

下に見えていた火は山の上にも迫って来てい

年組番

漢字読本
五枚目

ました。

なんびゃつかい なんぜんかい ごんべえ ほ

何百回、何千回と権兵衛は吠えました。

むら ひと き

村の人が、やっと気づいてくれました。

しょうぼうしゃ の むら ひと き

消防車に乗って村の人がやって来ました。

やま みち ひ じやま くるま とお

でも、山の道は火に邪魔されていて車では通

れません。

ごんべえ しょうぼうしゃ か むら ひと

そこで、権兵衛は消防車の代わりに村の人を

の なんと なんと ひ ところ はし い

乗せて何度も何度も火の所まで走って行って

あげました。

おとこ ひと おんな ひと むら ひと てっだ

男の人も女の人も、村の人みんなで手伝っ

みず はこ

て水を運びました。

ゆうがた かじ き

夕方になって、ようやく火事は消えました。

年組番

漢字読本
六枚目

こん べ え かつ や く かげ むら ひと やま か じ け

権兵衛の活躍のお陰で、村の人は山火事を消

すことができたのです。

むら ひと たち ほん とう こん べ え かん しゃ

村の人は本当に権兵衛に感謝しました。

つぎ とし しょうがつ おお も じ こん べ

そして、次の年のお正月に大きな文字で権兵

え むら か た ふだ むら い ぐち た

衛の村と書いた立て札を村の入り口に立てま

した。（おわり）

年組番

漢字読本
一枚目

「権兵衛の村」＊一年生＊

おかしおかし、あるところに右の目玉が金色に光る大きな大きな犬がいました。

その目は、どんなに遠くのものでも見る事が出来ると言われていました。

その犬は、小さな子供が大好きで、いたずらも大好きな犬でした。

名前は権兵衛といいました。

権兵衛は、毎日、月が沈み日が昇ると直ぐに天空を見上げ、大きな口を開けて大きな声でウオーツと一声吠えました。

それから、森や林を駆け抜けて、その村で一

年組番

漢字読本
二枚目

番高い山へ行つて木に登りました。

権兵衛は、木登りも出来る不思議な犬でした。

木の上からは、田んぼや川や竹やぶなどが見

えました。

いつもは、この木の上で昼寝をしながら、い

たずらを考える権兵衛でしたが、その日は違

いました。

草むらの中から、虫の王様と呼ばれている左

足の青い円形の虫が出て来たり、土の中の石

が貝殻のように白く光ったり、夕方にしか咲

かないはずの花が朝早くから咲いていたりと、

いつもとは違っていたのです。

年 組 番

漢字読本
三枚目

権兵衛は、とても嫌な感じがして、どうしても眠れませんでした。

そのうちに、権兵衛の耳に糸のように細かい雨が降って来ました。

そして、パチパチと何かが燃える音が聞こえて来ました。

ハッとして山の中腹を見ると、何と真っ赤な火が町の小学校に迫っているではありませんか。

大変だ、と思う間もなく、その火は、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十と数を増やして小学校に迫って行き

年 組 番

漢字読本
四枚目

ます。

大きな大きな山火事だったのです。

権兵衛は、木の上から、この山火事のことを村の人に大声で知らせようと思いました、朝早いせいか、村の人は、なかなか気づいてくれませんか。

幸運にも、今日は、学校がお休みなので先生も生徒も学校にはいません。

でも、子供達の学校が燃えてしまったのでは大変です。

権兵衛は力いっぱい吠え続けました。

下に見えていた火は山の上にも迫って来てい

年 組 番

漢字読本
五枚目

ました。

何百回、何千回と権兵衛は吠えました。

村の人が、やっと気づいてくれました。

消防車に乗って村の人がやって来ました。

でも、山の道は火に邪魔されていて車ででは通

れません。

そこで、権兵衛は消防車の代わりに村の人を

乗せて何度も何度も火の所まで走って行って

あげました。

男の人も女の人も、村の人みんなで手伝っ

て水を運びました。

夕方になって、ようやく火事は消えました。

年 組 番

漢字読本
六枚目

権兵衛の活躍のお陰で、村の人は山火事を消すことができたのです。

村の人達は本当に権兵衛に感謝しました。

そして、次の年のお正月に大きな文字で権兵衛の村と書いた立て札を村の入り口に立てました。（おわり）

年組番

漢字読本
一枚目

ごんべえ

むら

いちねんせい

「の」＊

みぎ

めだま

きん

むかしむかし、あるところにののが

いろ

ひか

おお

おお

いぬ

にるきながいました。

め

とお

み

そのは、どんなにくのものでもること

でき

い

がるとわれていました。

いぬ

ちい

こども

だいす

そのは、さながきで、いたず

だいす

いぬ

らもきなでした。

なまえ

ごんべえ

は、といいました。

ごんべえ

まいにち

つき

しず

ひ

のぼ

す

は、がみがるとぐに

てんくう

みあ

おお

くち

あ

おお

こえ

をげ、きなをけてきなで

うおっ

ひとこえほ

ウォーツとえました。

もり

はやし

か

ぬ

むら

いち

それから、やをけけて、そので

年組番

漢字読本
二枚目

ばん たか やま い き のぼ

い へ っ て に り ました。

こん べ え き のぼ で き ふ し ぎ いぬ

は、 り も る な でした。

き うえ た かわ たけ み

の からは、 ん ぼ や や や ぶ など が

えました。

き うえ ひる ね

いつも は、 この の で を し な が ら、 い

かんが ごん べ え ひ ちが

た ず ら を え る で した が、 その は

いました。

く さ な か む し おうさま よ ひだり

ぶ ら の か ら、 の と ば れ て い る

あし あお えん けい む し で き つち な か いし

の い の が て たり、 の の

かい なら しろ ひか ゆう が た さ

が の よう に く っ たり、 に し か

はな あさはや さ

かない は ず の が く か ら い て い たり と、

ちが

いつも と は っ て い た の で す。

年組番

漢字読本
三枚目

こんべえ

いや

かん

は、とてもなじがして、どうして

ねむ

もれませんでした。

こんべえ

みみ

いと

ほそ

そのうちに、のにのようにい

あめ

ふ

き

がってました。

ぱちぱち　なに

も

おと

き

そして、パチパチとかがえるがこえ

き

てました。

はっ

やま

ちゅうふく

み

なん

ま

ハッとしてのをてみると、とっ

か

ひ

まち

しょうがつこう

せま

ながのにっているではありません

せんか。

たいへん

おも

ま

ひ

ひと

だ、とうもなく、そのは、っ、

ふた

みつ

よっ

いっ

むっ

なな

やっ

っ、っ、っ、っ、っ、っ、っ、っ、

この

とお

かず

ふ

しょうがつこう

せま

い

っ、とをやしてにってき

年 組 番

漢字読本
四枚目

ます。

おお

おお

やま か じ

き き な き な だ っ た の で す。

ごん べ え

き う え

やま か じ

は、 の から、 この こと

むら

ひと

おお ー え

し

を の に で ら せ よ う と し ま し た が、

あさはや

むら

ひと

き

い せ い か、 の は、 な か な か づ い

て くれ ま せ ん。

こう う ん

きょう

がっ こう

やす

せん せい

に も、 は、 が お み な の で

せい と

がっ こう

も には い ま せ ん。

こ ど も た ち

がっ こう

も

で も、 の が え て し ま っ た の で は

たい へん

で す。

ごん べ え

ち から

ほ

つづ

は い っ ぱ い え け ま し た。

した

み

ひ

やま

う え

せ ま

き

に え て い た は の に も っ て て い

年組番

漢字読本
五枚目

ました。

なんびゃっかい なんぜんかい ごんべえ ほ

、と は えました。

むら ひと き

の が、 やっと づいてくれました。

しょうぼうしゃ の むら ひと き

に っ て の が やって ました。

やま みち ひ じゃま くるま とお

でも、 の は に されていて では

れません。

ごんべえ しょうぼうしゃ か むら ひと

そこで、 は の わりに の を

の なんど なんど ひ ところ はし い

せて も も の まで っ て っ て

あげました。

おとこ ひと おんな ひと むら ひと てっだ

の も の も、 の みんなで っ

みず はい

て を びました。

ゆうがた かじ き

に なって、 ようやく は えました。

年組番

漢字読本
六枚目

ごんべえ かつやく かげ むら ひと やまかじ け

ののおで、のはを

すことができたのです。

むら ひとたち ほんとう ごんべえ かんしゃ

のはににしました。

つぎ とし しょうがつ おお もじ ごんべ

そして、ののおにきなで

え むら か た ふだ むら い ぐち た

のといたでをのりにてま

した。
(おわり)